

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(3 7)

中村周平

「自分にまだできることはある」

それを実現するために必要であったことは、立ち上げる組織を事故当事者のみならず、スポーツ事故に関心を持つ多くの方にとって参加しやすい『場』として位置づけることだと私は感じました。

「私が自分以外の事故被災者や家族の声を聴きたいと思ったように、弁護士や大学研究者といったスポーツ事故に関心を持つ方、自分と同じように事故に遭い同じ境遇の方との出会いや助言を求めている方、少ないかもしれないけど指導者の中にもそういった方がいるのでは」

また、そう感じた背景には、これまで触れてきた2つの団体の取り組みにも参考にできるものがたくさんあったからです。

「全国学校事故・事件を語る会」の大集会には、事故当事者のみならず大学研究者や、現役の教員、スクールソーシャルワーカーといった方々が学校事故の現状を学ぼうと、高い意識をもって参加されていました。

「全国柔道事故被害者の会」のシンポジウムでは、医師や大学研究者といった方々が、それぞれの専門分野から柔道事故を捉

え、事故を未然に防ぐためには、どのような取り組みが必要か、が報告されていました。もともとは、事故当事者同士をつなぐネットワーク構築を目的としていた団体がそういったかたちで様々な分野の方々と連携し、次のステップにつなげていく様子に大きな感銘を受けただけでなく、その先の可能性に計り知れないものを感じていたのです。

2015年12月に発起人である弁護士の先生、お世話になっていた同志社の指導教員の先生、中村の3人を中心に準備会を立ち上げ、そこにスポーツ事故に関心をもつ弁護士の先生や柔道事故をはじめ、スポーツ事故予防を研究されている大学研究者の方に参加していただきました。怪我のリスクが高く、重篤な事故も発生しているラグビーと柔道の安全対策や事故対応における現状と課題を共有し合いました。

その中で感じたことは、事故が起きたスポーツの種別や年月日、事故被災者の年代によって事故の状況や、相手方の対応、現行で取り組まれている安全対策に明らかな違いがあったことでした。そして、最も不

足していたのは、やはり、スポーツ事故被災者本人や家族の「生の声」だったと思います。

「ラグビーに限らず、様々なスポーツで怪我をされた方やその家族にご自身の事故について話してもらい、それを参加者を交えて議論できる集まり。それぞれの立場からの意見や考えを出し合うことで、各々が学び合える『場＝勉強会』というかたちで立ち上げてみてはどうか」

2度の準備会を踏まえ、第1回開催に向けて走り出しました。